

<文化財の種類 有形文化財（考古資料）> 追加指定・名称変更

旧名称	くだらでらいせきしゆつどせんぶつ 百済寺遺跡出土埴仏
新名称	くだらであとしゆつどせんぶつ 百済寺跡出土埴仏
員数	108点（うち既指定65点、追加指定43点）
所在地	枚方市 ^{みやこがおかちょう} 都丘町6番9号 枚方市観光にぎわい部文化財課山田分室
所有者	枚方市
指 定 年月日	平成18年1月20日
指 定 番 号	考第53号
年 代	飛鳥～奈良時代
<p>説 明</p> <p>本件は平成17年（2005）度大阪府指定有形文化財に指定された「百済寺遺跡出土埴仏」65点に、特別史跡百済寺跡から出土した埴仏43点を追加し、108点とするものである。</p> <p>○百済寺跡の概要</p> <p>枚方市^{なかみやにしのちょう}中宮西之町所在の百済寺跡は、奈良時代に創建されたと考えられる仏教寺院跡である（図1）。昭和7年（1932）の調査から平成の再整備にかかる調査にわたり大阪府や枚方市によって発掘調査が行われてきた。その結果、建物基壇や礎石などを検出し、百済寺の伽藍配置が南門、中門、金堂、講堂が中軸線上に南北に配置され、中門と金堂にとりつく回廊の内側に東塔、西塔が配置される2塔1金堂式であることが明らかになった。また、講堂の北側には食堂と推定される掘立柱建物跡（北方建物）が確認されている。出土遺物として軒丸瓦・軒平瓦、埴などの瓦埴類、金属製品、堂内を荘厳したと考えられる埴仏片などの遺物が多数出土した。出土した瓦などの遺物から、百済寺は奈良時代後半から平安時代初頭にかけて造営され、平安時代前半に盛行、廃絶したと推測されている（註1）。また、発掘調査だけでなく、『続日本紀』などの文献資料からも百済寺は朝鮮半島の百済の王族である百済王^{くだらのこにきしし}氏が建立した寺院であることが推定されている。なお隣接する禁野本町^{きんやほんまちいせき}遺跡では、百済寺周辺で区画された道路跡などが検出されており、百済王氏によって百済寺の周辺が土地区画をもって整備されていたことが明らかになっている（註2）。</p>	

寺域は外郭築地に圍繞された範囲であり（図2）、昭和16年（1941）に史跡、昭和27年（1952）に特別史跡に指定され、現在史跡公園として整備されている。西南部の百済王神社は史跡範囲外のため埋蔵文化財包蔵地「百済寺遺跡」として法的に扱われている。今回、百済寺跡の寺域から出土した埴仏を一括で指定し保護を図るため、既指定の「百済寺遺跡出土埴仏」に史跡範囲内から出土した埴仏を追加指定するとともに、名称を変更する。

○百済寺跡の調査

百済寺跡の伽藍地にかかる主要な調査および埴仏片が出土した調査について概要をまとめる。

昭和7年に大阪府史蹟名勝天然記念物保存調査會が行った。当該調査が最初の学術的な調査で、百済寺跡の1次調査に位置付けられる。伽藍地の礎石の位置の把握を中心に行われ、伽藍の規模・構造が明らかになった。

昭和40年（1965）には史跡公園を整備する計画のもと大阪府教育委員会により伽藍地の東部分を中心に調査が行われた。この調査により、北回廊や北方建物の詳細が明らかになった。また当該調査では出土層位は不明であるが「金堂仏壇西北から」埴仏片が出土したと報告されている（註3）。

平成13年（2001）に伽藍の西南院地区に当たる百済王神社の境内地（百済寺遺跡）で、拝殿の建て替えに伴う調査が財団法人枚方市文化財研究調査会により行われた。掘立柱建物跡等が検出され、遺物は百済寺で使用されたと考えられる瓦が多量に出土したほか埴仏片65点が出土している（註4）。

平成17年（2005）から平成25年（2013）には特別史跡百済寺跡の再整備事業に伴い伽藍地の発掘調査が5次から13次調査にわたり行われた。伽藍地の西南院地区等一部を除き、主要伽藍や北方建物等において調査が行われ、今回指定する埴仏片の多くは当該調査で出土したものである。

○既指定「百済寺遺跡出土埴仏」の概要（表2、図11）

平成13年（2001）の調査により出土した埴仏片を一括で府指定にしたもので埴仏の種類としては、小型の連坐埴仏と火頭形三尊埴仏である。漆や金箔が良好に遺存する個体があり、製作当初は金箔が像の全面に施されたと考えられる。いずれも中世の包含層から出土しているが、百済寺で使用されたと考えられる瓦が出土していることや寺域内から出土していること、埴仏の像様から埴仏が奈良時代のもと考えられ、百済寺に伴う資料として当該調査で出土した埴仏片を一括で大阪府有形文化財に指定した。

○今回指定する百済寺跡出土埴仏の概要

（1）出土状況について（図2・3）

今回指定する埴仏片は、昭和40年（1965）に大阪府教育委員会が行った調査と平成17年（2005）度から平成25年（2013）度にかけて枚方市教育委員会および財団法人枚方市文化財研究調査会

(平成 24 年度からは公益財団法人)が行った再整備事業にかかる調査で出土したものである。

再整備事業にかかる調査で、埴仏片は僧院地区の講堂西側や西塔北側付近を中心に出土し、東回廊や西回廊周辺の調査区からも出土した。出土層位はいずれも瓦溜や攪乱土中から出土したもので、寺院で用いられていた当初の位置はとどめていないものと考えられる。大型多尊埴仏片の多くは、講堂西側に集中して出土している。講堂西側には百済寺造営と同時期のものと推定される掘立柱建物跡が検出されており、そこに埴仏が安置された可能性が考えられる。また、昭和 40 年の調査で金堂跡から出土した埴仏片の出土位置を積極的に評価すると、大型多尊埴仏片は金堂の壁面荘厳に用いられた可能性も考えられる。小型埴仏については、西塔北側で多く出土していることから、塔内の壁面を荘厳した可能性が考えられる。

(2) 出土埴仏の概要 (表 1)

百済寺跡からは大型多尊埴仏、火頭形三尊埴仏、方形三尊埴仏、小型埴仏(二尊・四尊連坐埴仏、千体仏)が出土しており、その他種別不明の樹木文埴仏も出土している。以下で、埴仏各種について概要を述べる。

大型多尊埴仏(図 4・5・6): 19 点。図 4 で示した図様のうち、天蓋宝珠 1 点、主尊頭部 1 点・頭光背 1 点・左腕部 1 点・脚部から蓮華座 1 点、左菩薩頭部 1 点・上半身 2 点・左脚部 2 点・脚部から蓮華座 1 点、右菩薩頭光背から上半身 1 点、右比丘 2 点、左天部肩部から右腰部 1 点・脚部 1 点、右天部右腰部 1 点・左足部 1 点、右眷属 1 点の部分を確認されている。重複する部位が存在することから、大型多尊埴仏は 2 個体以上製作されたと推測できる。漆や金箔が遺存する破片がある。大型多尊埴仏は夏見廃寺(三重県名張市)や二光寺廃寺(奈良県御所市)など百済寺跡を含め全国の 12 か所で出土例および伝世例が確認されており^(註5)、それらから像様については部分的に明らかになっている。推定縦約 36 cm、横約 60 cm に復元されるもので、埴仏の中では大型の種類である。百済寺跡から出土した大型多尊埴仏は、これまでの出土例と比較すると特筆すべき点がある。1 つは図像の細部が異なる点である。図像が異なるのは左右菩薩の頭部裝飾部分と左菩薩の脚部付近^(註6)、図像下端部の須弥壇や図像の左右端部の多角塔が施されない点である。このことから、夏見廃寺や二光寺廃寺出土例とは、型または原型資料が異なるものと考えられる^(註7)。このほかにも、型抜き後に部分的な改変が行われており左天部の足部付近にヘラ工具による加工痕が確認できる。2 点目は製品が主尊・左右菩薩までの範囲と左右天部の範囲で分割されている点である。その他の出土例ではこの部分の分割は多く見られず、百済寺独自の製作方法であると思われる^(註8)。夏見廃寺出土例および二光寺廃寺出土の大型多尊埴仏は、須弥壇部分の向かって右側部分に「甲午年五月中」と造像銘と考えられる文字が記されており、夏見廃寺の創建瓦の年代観等から「甲午年」は持統天皇 8 年(694)のことと推定されている。このことからこの大型多尊埴仏の型もしくは原型資料は持統天皇 8 年に製作されたものと推定されている。

火頭形三尊埴仏(図 7): 5 点。天蓋部分 2 点、主尊脚部 1 点・蓮華座 1 点、右側唐草 1 点を確認されている。同型の資料から完形の大きさは縦約 15 cm、横約 10.5 cm であると推定される。

火頭形三尊塼仏は、塼の形状を火頭形（舟形）に成形したものである。すでに大阪府有形文化財に指定されている百済寺遺跡出土の火頭形三尊塼仏と同型の資料で、金箔が遺存する個体がある。火頭形三尊塼仏は大きく2種類の型が確認されており、そのうちの1つである穴太廃寺（滋賀県大津市）や阿弥陀谷廃寺（奈良県奈良市）から出土した例（註9）と法量及び像様がほぼ同じであることから、同原型資料であると考えられる。火頭形三尊塼仏の年代については、7世紀後半と想定され（註10）、百済寺の創建年代とは大型多尊塼仏と同様に差があり、伝世品である可能性がある。

方形三尊塼仏（図8）：3点。主尊蓮華座1点、左菩薩腕部から腰部1点、左飛天1点が確認されている。方形三尊塼仏は大きく2種類の像様が確認されており、そのうち夏見廃寺で多く出土する方形三尊塼仏B（註11）と同原型の資料であると考えられる。この方形三尊塼仏Bは塼仏の種類では最も広く分布するものである。同型の資料から完形の大きさは縦約21cm、横約14cmであると推定される。方形三尊塼仏Bの年代については、7世紀末から8世紀に創建された寺院から出土していることから、塼仏についても同様の時期に製作されたものと推定される。

小型塼仏（図9）：9点。二尊および四尊連坐塼仏と考えられる破片が8点、千体仏（多尊塼仏）が1点出土した。二尊・四尊連坐塼仏はすでに大阪府有形文化財に指定されている百済寺遺跡出土の連坐塼仏と一連の資料で、唐招提寺（奈良県奈良市）の小型独尊塼仏（註12）と像様構成が同じものであると考えられる。唐招提寺例が縦4.0cm、横2.2cmに対し、百済寺跡出土連坐塼仏の一軀分の大きさが縦3.0cm、横1.8cmであり、おおよそ相似形である。このことから百済寺跡出土の連坐塼仏の型は唐招提寺例の段階の製品を踏み返して製作されたものと推定される。千体仏（多尊連坐塼仏）は縦5.0cm、横3.9cmが残存する。縦約1cmの独尊が5段×4列以上配列されている。現在のところ、同原型と考えられる例は確認されていない。

樹木文塼仏（図10）：7点。いずれも樹木の部分と考えられる文様が確認できる。具体的な製作時期や用途については不明であるが、現在のところ百済寺のみで確認される文様である。

○評価

塼仏は、現在日本では約150か所から出土・伝世例が確認されており、特に奈良県に多く分布し、次いで三重県や滋賀県に集中して分布する傾向がある。大阪府内では17遺跡から出土しているが、今回追加指定する塼仏片を含め、百済寺跡からは先述の6種類108点と、大阪府内ではその種類、出土点数ともに突出したものである。特に今回追加指定の大型多尊塼仏については、現在確認されている出土例・伝世例では同遺跡・寺院で2個体以上確認されている例は珍しく、非常に貴重な資料である。その製作技法について分割の方法が用いられている点、また像様が夏見廃寺や二光寺廃寺の出土例とは異なる部分があり、大型多尊塼仏に2種類以上の型もしくは原型資料があることが確認された点も重要である。

前述の「出土状況について」で記載した通り、寺域内における塼仏の出土地点は、種類ごとにある程度偏在しており、その分布傾向から各塼仏の帰属遺構を推測することが可能であるので、塼仏の用途や当時の荘厳の様相が推測される資料である。また、大型多尊塼仏や火頭形三尊塼仏、

方形三尊埴仏の類例では7世紀後半から8世紀前半に創建された寺院から出土するものが多く、百済寺跡から出土した埴仏はやや年代差があり、伝世された可能性をもっている。また多種の埴仏が同一寺院で使用されていたことがわかる点で学術的に重要なものと言える。

以上のように、百済寺跡出土の埴仏は百済寺の性格や大阪府内、日本国内における仏教文化のあり方を知る上で非常に重要であり、本資料は大阪府指定文化財としてふさわしいものと評価できる。

既に大阪府指定文化財に指定されている「百済寺遺跡出土埴仏」は、現在の埋蔵文化財包蔵地としての扱いは異なるが、埴仏の種類や寺域から出土していることから、本資料と一連のものと考えられる。よって「百済寺遺跡出土埴仏」に本資料を追加し、「百済寺跡出土埴仏」として名称変更し、指定する。

[註]

(註1) 大阪府教育委員会『河内百済寺跡発掘調査概報』1965、枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会『特別史跡百済寺跡』2015

(註2) 財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報27・28』2008

(註3) 前掲註1 大阪府教育委員会 1965。夏見廃寺（三重県名張市）出土の方形三尊埴仏と同型式であると想定されているが、再整備にかかる調査の報告では大型多尊埴仏と報告されている。

(註4) 財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報23』2002

(註5) 名張市教育委員会『夏見廃寺』1988、廣岡孝信「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年第2分冊』奈良県立橿原考古学研究所 2006、廣岡孝信「奈良県御所市 二光寺廃寺の発掘調査」『考古学雑誌』第92巻第1号 2008、森本貴文編「日本の埴仏集成」『東アジア瓦研究』第3号 東アジア瓦研究会 2013

(註6) 具体的には、百済寺跡出土埴仏には左右菩薩の頭部装飾に屏の表現がない点、左菩薩脚部に垂飾の表現がない点が夏見廃寺や二光寺廃寺例と異なる部分である。

(註7) 埴仏の型は、凸型の原型に粘土を押し当て焼しめて製作されたものと考えられる。埴仏型を製作するために用いられる凸型は原型資料と呼ばれる。また、埴仏型から製作された製品でさらに別の埴仏型を製作する、踏み返しが行われる場合がある。

(註8) 石光寺（奈良県葛城市）では大型多尊埴仏片が1点出土しており、左菩薩腰部付近の部分である。百済寺跡出土例と同様の部分で端部が見られ、分割して製作されたものと考えられる。（奈良県立橿原考古学研究所編 1992）

(註9) 小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』真陽社 1989、倉吉博物館『埴仏—土と火から生まれた仏たち—』1992

(註10) 火頭形三尊埴仏は、僧道昭の活動と関わりと推測されており、天武朝を中心とした年代が想定されている（萩原 2003）。

(註11) 名張市教育委員会『夏見廃寺』1988

(註12) 倉吉博物館『埴仏—土と火から生まれた仏たち—』1992

[参考文献]

大阪府教育委員会『河内百済寺跡発掘調査概報』1965

大脇潔「埴仏と押出仏の同原型資料—夏見廃寺の埴仏を中心として—」『MUSEUM』418 東京国

- 立博物館 1986
- 大脇潔「埴仏とその製作年代」『埴仏—土と火から生まれた仏たち—』倉吉博物館 1990
- 小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』真陽社 1989
- 葛城市歴史博物館『輝く美の埴仏』葛城市歴史博物館特別展図録第9冊 2008
- 久野健『押出仏と埴仏 日本の美術第118号』至文堂 1976
- 倉吉博物館『埴仏—土と火から生まれた仏たち—』1992
- 財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報23』 2002
- 財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報27・28』2008
- 清水昭博「出土状況からみた埴仏用法の検討」『考古学論攷』第19冊 奈良県立橿原考古学研究所 1995
- 中東洋行「河内百済寺跡出土埴仏雑考」『特別史跡百済寺跡』枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会 2015
- 名張市教育委員会『夏見廃寺』1988
- 奈良県立橿原考古学研究所『当麻石光寺と弥勒仏 概報日本最古の石仏と白鳳寺院』吉川弘文館 1992
- 萩原哉「埴仏」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書第25集—山城国府跡第54次（7XY' UD-4地区）発掘調査報告—』大山崎町教育委員会 2003
- 肥田路美「大型多尊埴仏と法隆寺金堂壁画」『古代寺院の芸術世界 古代文学と隣接諸学6』竹林者 2019
- 枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会『特別史跡百済寺跡』 2015
- 廣岡孝信「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年第2分冊』奈良県立橿原考古学研究所 2006
- 廣岡孝信「奈良県御所市 二光寺廃寺の発掘調査」『考古学雑誌』第92巻第1号 2008
- 森本貴文編「日本の埴仏集成」『東アジア瓦研究』第3号 東アジア瓦研究会 2013